

ひたちなか 埋文だより

33



道理山遺跡の玦状耳飾り 市内の道理山遺跡^{むべやま}で採集したという石製品を、二川信隆さんよりいただきました。耕作で付いたような傷はありますが、ほぼ完全な状態のものです。長さ 51 mm, 幅 52 mm, 厚さ 7 mm, 重さ 31.4g。滑石^{かつせき}という軟らかな石が材料です。縄文時代前期の耳飾りで、中国の玉器の「玦^{けつ}」に形が似ていることから「玦状耳飾り」と呼ばれています。茨城県内では 22 遺跡から 26 点が報告されていました^{*}（瓦吹・江原 2010）。完全な形状に近いものは、これが 6 例目となります。
 (2009.9.15 寄贈, 2010.8.25 撮影)

CONTENTS

1 ケース・ミュージアム 15・18 佐藤次男考古学資料Ⅲ・Ⅳ (古墳・奈良・平安時代, 中・近世)

「出会い, 別れ, そして夢考古学の旅路」第 5 回 常総台地研究会の設立と活動(2) (川崎純徳)

展示資料紹介 十五郎横穴墓群館出支群出土の須恵器 (佐々木義則・稲田健一)

1 ケース・ミュージアム 16 ひたちなか市の古代鉄生産・遺跡めぐり 古代製鉄炉にみちのくの技をみる

横穴墓を歩く④ 赤羽横穴墓群B支丘1号墓 (鈴木裕芳) 佐藤次男考古学資料の馬具 (片平雅俊)

1 ケース・ミュージアム 17 黒曜石の石器 2 ひたちなか市の遺跡⑥ 平磯・阿字ヶ浦中学区編

歴史の小窓⑤ メシにすっぺ 虎塚古墳花便り⑤ ギンラン ほか

* 瓦吹 堅・江原美奈子 2010 「茨城県の玦状耳飾り」『玉文化』第 7 号, 99-101 頁



(1980年 北茨城市内にて)

佐藤次男 考古学

資料Ⅲ・Ⅳ (古墳・奈良・平安時代、中・近世)

Ⅲ 2009年12月23日(水)～2010年2月14日(日)

Ⅳ 2010年9月25日(土)～12月5日(日)



寄贈された古墳時代の遺物

古墳時代 古墳時代に関係する資料は、二二三点です。出土した場所が記されているものには、市内では大平古墳群・磯崎東古墳群・三反田遺跡等のものがあり、市外では水戸市や旧那珂町・旧八郷町・大洗町・茨城町・結城市等から採集したものがありません。資料は土師器が最も多く、その他に須恵器や埴輪、馬具等の鉄製品もみられます。その中から展示では、磯崎東古墳群出土と思われる須恵器の甕や旧那珂町出土の土師器の杯、出土地不明の冠を付けた人物埴輪の頭部や馬形埴輪の一部等を紹介しました。

今回、古墳時代の展示を準備するため、寄贈された資料を調査したところ、注目すべき遺物があることが判明しました。その遺物は、「乳のみ児を抱く埴輪」が出土した古墳として有名

な「黄金塚古墳」出土の大刀と馬具です。これらの遺物に出土地等の記載はありませんが、佐藤次男氏が所属していた水戸第一高等学校史学会が、一九四八(昭和二三)年に発行した『史窓』第一号に掲載されている実測図から、黄金塚古墳出土であることが判明しました。報告文には、これらの遺物の所在について「同地の協同組合の某氏が保管されている」と記されていますので、いつの頃かわかりませんが、何らかの事情を経て佐藤氏が保管することになったものと思われる。

出土の経緯については、報告文に一九四七(昭和二二)年に古墳の前方部にある横穴式石室を調査し、その際に奥壁北西隅付近から「刀剣の破片、かぶとの上部、数個の鐵塊」が出土したことが記されています。「かぶとの上部」とされているものは馬具の雲珠を間違って表記したもので、「数個の鐵塊」は馬具の一部であることが実物の観察から明らかとなりました。馬具に関しては、片平雅俊氏に実測と報告をお願いしました(四頁参照)。

古墳は、残念ながら発掘調査されぬまま一九五六(昭和三一)年に壊されており、古墳に伴う遺物は「乳のみ児を抱く埴輪」等数点の埴輪が現在センターに保管されているだけでした。よって、佐藤氏が保管されていた今回の資料は、黄金塚古墳を知る上で大変貴重なものとなります。

(稲田健一)

奈良・平安時代 ひたちなか市大平遺跡から出土した須恵器高杯たかづきや有台杯蓋は、水戸一高史学会の雑誌『史窓』第一号に高柳忠正氏によって報告された資料であると思われる。その報文中には「本校史学会員佐藤君が附近住民より入手したものである。」と記されています。須恵器高杯の内面には「昭和二十二年十一月十四日 勝田町大平出土」との注記があり、史学会として大平古墳を調査したのが昭和二十二年六月のことですから、その年の秋に再度現地を訪れた際に地元の方からいただいた資料であったことがわかります。

また、窯底の土が付着している須恵器杯破片は、須恵器の胎土からみて、おそらく水戸市木葉下ぼけ窯跡群で採集した資料と思われる。焼き台（失敗品を窯底面に並べて製品を置く台としたもの）でしょう。窯土を残したまま保管していた点に、佐藤氏の見識の高さが窺えます。

中・近世 佐藤氏の多くの業績のなかで、とくに有名な論文のひとつに、ひたちなか市沢田さわだ付近に製塩を生業とする村の存在を推定した「伝説千々乱風」（『茨城県史研究』第三二号）があります。それは、かつて阿字ヶ浦北方の海岸にあった村が、チヂランプウと呼ばれる大風により人家は壊れ村は砂に埋没してしまったため周辺に移住したという、近世後期の文献に記されていた伝説について検討を加えた研究でした。この論文は、文献史料、民俗資料、考古資

料のほか自然史研究の成果をも用いて導き出されてきて、佐藤氏が那珂湊地域を中心に進められてきた地誌的研究の一環に位置するものといえます。またこの論文が研究者の注目を集めた理由は、沢田遺跡の存在を確認した点にありました。佐藤氏は海岸地帯を自ら踏査し、そこで採集した遺物の様相から大規模な墓域の性格をもつ沢田遺跡の存在を確認し、周辺に村の存在を推測したのです。それは考古学研究者としての同氏の真骨頂を十分に発揮した内容でした。そして沢田における集落の存在をほぼ確実にした上で、史料を援用してその村の生業を製塩業と推測したのです。そして最後に次のような言葉を呈しています。

「沢田海岸から村松海岸の間には、製塩の遺構と思われるものが発見されており、やがて発掘調査の手段によって、製塩業の実態がより具体的に実証されることになるであろう」

それは茨城県教育財団により沢田遺跡の大規模発掘調査が開始される一二年前のことでした。

（佐々木義則）



沢田遺跡から採集した銭貨・骨

歴史の小窓 その五

メシにすっぺ



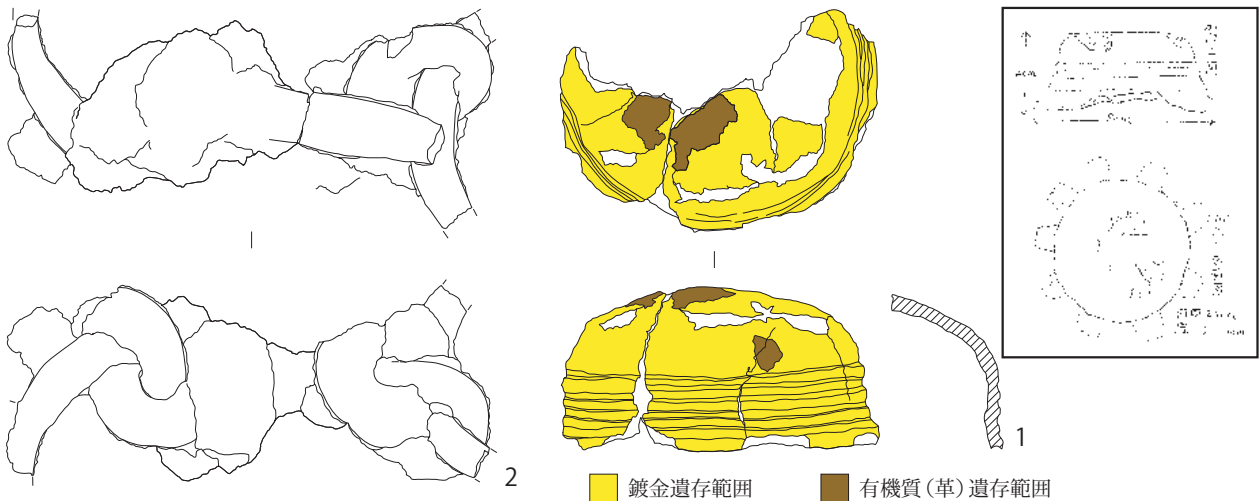
上の写真は、ひたちなか市富士ノ上II遺跡から出土したオオムギの実

体顕微鏡写真です。竪穴住居跡の竈のなかから出土したのですが、焼けて炭になっていたため、腐らずに残ったものです。発掘調査でとっておいた竈の中の土を調査後に洗い、土のなかに含まれていた炭になった種を見つけました。そして見つけた種は、分析会社に依頼して同定してもらい、「オオムギ」と判明したのです。同定データは埋文センターで整理され、埋文日より三一号で報告。これでようやく郷土の歴史資料として活用することができるようになります。

ひたちなか市武田遺跡群の古代集落では、九世紀後半頃からオオムギの出現頻度が高くなることがわかっています。古代の班田制に基づく集落が、この頃から解体し始めることを考えると、畠作によりオオムギをたくさん作って、食糧米の不足を補い始めたものと考えています。平安時代の村で、夕方、とうちゃんが、「そろそろメシにすっぺ。」と、かあちゃんに言っつて、土器に盛られて出てくるご飯は麦飯だった、と、私は想像しています。

参考文献 『武田遺跡群 総括・補遺編』

（佐々木義則）



佐藤次男考古学資料の馬具 (S = 1/2) 右上の□内は『史窓』第1号「大平遺跡調査報告」から転載

佐藤次男考古学資料の馬具

片平 雅俊

調査の結果、確認されたのは以下の2点です。

有脚半球形雲珠 (上図1) 鉢部の約2分の1が遺存していますが、脚はすべて欠損しています。

鉢部は推定直径 8.4 cm、遺存高 4.4 cmで、厚さ 5 mm前後の地鉄の上に銅板を被せ、鍍金して作られています。

鉢部は、端部が外側に突き出ていますが、その後は直線的に立ち上がり、頂部は平坦気味です。このため鉢部の形状は半球形というより、断面形は台形に近い印象となります。鉢部下半の直線的に立ち上がっている部分には、幅 3 mm前後の断面逆台形の凹線が、4段にわたって巡っています。

鉢裾端部には、脚の破断部分が3か所で確認できます。破断部分の間隔から判断すると、8か所に脚が取り付けられていたと思われますが、脚部の形状は不明です。

板状立間素環鏡板付轡 (上図2) 細かく観察すると、棒状金具の先端に付いた環に、別の金具が通っている状態で錆びていることが確認できます。錆びている金具は、断面径が 9 mm前後のガッシリとした鏡板・銜・引手の破片であることから、板状立間素環鏡板付轡であることが明らかになりました。

両端に位置する鏡板は、いずれも半分以上が欠損していますが、遺りが良い方には、ごく一部立間が遺存しています。立間の幅は、鏡板の環の径に比べ広くないようです。

出土古墳を特定する根拠 『史窓』第1号には先述のほか、「直径八糎で圖の様な形をしてゐるが發掘當時は圖に於いて點線で示した部分、即ち突出物が周圍に附いてゐたとのことである」との記述のほか、雲珠のスケッチ脇には、「直径 8 cm・高さ 4 cm、円周 26 cm・厚さ 3-5 mm」の注記があります(上図□内)。

スケッチに表現された金銅板欠損範囲と現存する雲珠の状況が類似すること、遺物の法量と注記の数値とが一致すること、その他の伴出遺物の状況などから、この2点が、「かぶとの上部、数個の鐵塊」と『史窓』第1号で報告された、黄金塚古墳出土資料であることは確実です。

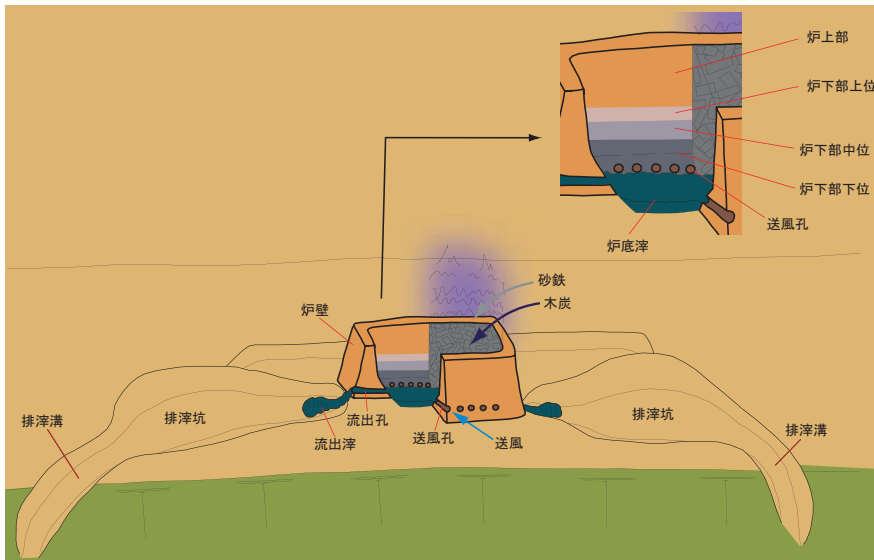
また雲珠は、出土した際にはほぼ完存していたこと、鉢頂部に飾釘は伴わないこと、脚部のおおよその形状が明らかになりました。

本馬具が意味すること 黄金塚古墳から出土したこの馬具は、轡や雲珠の形状から、6世紀第2～3四半世紀の時期であると考えられます。同時期の同様の馬具は、笠谷6号墳(ひたちなか市)や舟塚1号墳(東海村)で確認されています。笠谷6号墳出土例は、この黄金塚古墳出土例と大きさや形態がよく似ており、黄金塚古墳に副葬された馬具を復元する際に参考になります。

なお、本稿をまとめる最後になって、1点残っていた轡の破片が接合しました。再度、稿をあらためて報告したいと思います。

この展示は、平成二二年度遺跡めぐりに合わせた内容として、ひたちなか市の古代製鉄遺跡である後谷津遺跡を紹介した展示です。展示にあたり、出土した遺物を再整理し、炉壁や鉄滓の接合作業を実施したところ、多くの資料が接合したため、古代製鉄炉の状態をよりわかりやすく展示することができました。また、現在までの考古学の研究成果を参考にしながら、下図のような復元図も作成してみました。

後谷津遺跡は、昭和五六年に市民のかたからの通報により発見することができた遺跡です。昭和六三年に宅地造成により壊されてしまうこととなったため、当時の勝田市教育委員会内に後谷津遺跡調査会が組織されて発掘調査が実施されました。発掘調査では、製鉄炉が一基調査され、炉壁や鉄滓といった遺物が多数出土したのです。ひたちなか市唯一の古代製鉄炉であり、とても重要な遺跡といえるでしょう。



後谷津遺跡古代製鉄炉の復元想像図

遺跡めぐりは、「古代製鉄炉にみちのくの技をみる」と題して、二〇一〇年五月一四日に実施しました。当日はすがすがしい天気のおかげで、参加者三〇名と添乗員二名で、栃木県立なす風土記の丘資料館湯津上館と、福島県文化財センター白河館まほろんを見学しました。

まほろんには、福島県相馬地方の遺跡で発掘された古代製鉄炉が復元してあります。参加者



まほろんで古代製鉄の展示を見学する参加者

は、粘土でできた製鉄炉の大きさを感じたり、実際に踏みふいごを踏んで製鉄炉内に風が送られる様子を興味深く体験していました。また展示室では、職員の方に説明をいただきながら、古代製鉄関係の展示のほか、常設展示や企画展示を、ときどき笑い声が起こるような楽しい雰囲気のもと、じつくりと見学することができました。

（佐々木義則）



技術を探る 黒曜石等でつくられた石器を観察すると、それを加工した際の痕跡を見ることが出来ます。その痕跡を研究することは、当時の技術を探ることになります。その研究の一つの方法として、石器と同じ石材を使って実際につくってみるといふ手段があります。このことを「実験考古学」という言葉で表現したりします。今回の展示では、石器の研究者である橋本勝雄氏が、石器研究のために製作した黒曜石の石器を展示しました。これらの石器は、二〇〇二年埋蔵文化財調査センター開館一〇周年記念の企画展示の際に寄贈されたものです。復元された石器には、ナイフ形石器や槍先形尖頭器、細石刃のほか、製作過程で生じる剥片もあり、母岩からどのように石が剥がされて製品が作られていくのかを順を追ってみる事ができます。

黒曜石 黒曜石とは、流紋岩質な火山岩の一種で、天然のガラスの塊です。黒曜石の産地は



石器づくり



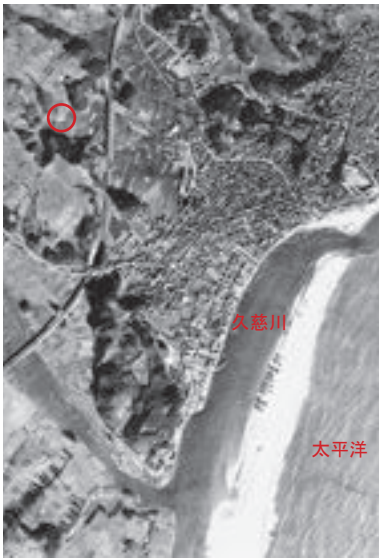
展示のようす

全国にあります。良質なものが産出される場所として、北海道白滝^{しろたき}や長野県和田峠^{わだとうげ}、東京都神津島^{かづしま}などがあります。

子どもたちの挑戦 今回の展示は、「ふるさと考古学④石の考古学」の参考展示として企画しました。講座では、受講生が直接橋本氏から復元された石器の説明を受け、その後、黒曜石を使ってナイフ形石器をつくることに挑戦しました。石器をつくる子どもたちに講師がそつと手をさしのべるその様子は、遙か昔の石器づくりの技術伝承の風景のようでした。(稲田健二)



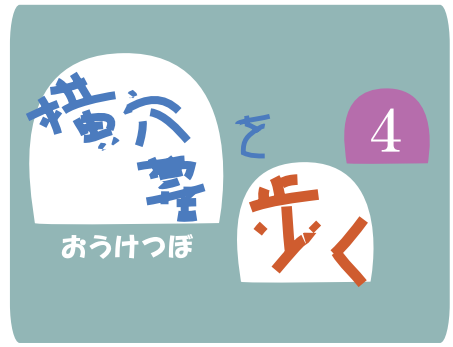
常設の展示ではない (2010.6.29)



横穴墓の位置（丸囲み部分）

日本の古代のうち、およそ三世紀半ばから七世紀にかけて時代を古墳時代と呼んでいる。このとき墳丘をもつ墓づくりが盛んに行われたのだが、六世紀後半の東国には、丘陵などの斜面に横穴を掘る墓制（横穴墓）が伝わってきて、盛り土のある高塚式古墳と並行した墓づくりが繰り返された。

さてこの横穴墓なるものは、群集する、副葬



茨城県日立市

あかばね
赤羽横穴墓群 B 支丘 1号墓

鈴木裕芳

（日立市郷土博物館）



赤羽横穴墓群 B 支丘 1号墓

品が貧弱、盛り土を必要とせず簡略的である、などのことから、高塚式古墳の被葬者よりは低い階層の墓であると考えられてきた。ところが、今回紹介する日立市の赤羽横穴墓群 B 支丘 1号墓は、こうした概念を根底から覆した。そのプロフィールを簡単に紹介しよう。規模Ⅱ墓室の奥行五・四七m、高さ最高三m、最大幅三・八六m。副葬品Ⅱ冠の金銅製立飾り金具、金銅製耳環、琥珀製瓊玉、水晶製切子玉、ガラス製丸玉・小玉、大刀、弓、鉄鏃、鉞、挂甲、金銅製馬具等々。立地Ⅱ横穴墓が造営された四つの丘陵（支丘）のうち、中央の B 支丘の先端部に一基だけ造営される。

横穴墓の一般的な大きさと身を屈めて出入りする程度。墓室の天井に手が届かないというのは、まず考えられない。副葬品も、同時期の前方後円墳であってもこれほどのものはない。加えて支丘独占という様相からは、「隔絶した地位、権力」という被葬者の姿がうかが

えよう。

一号墓の豊富な武器・武具類は、被葬者のなかに有力な武人のいたことを示す一方、冠の立飾り金具は、これを被った者が大和政権に仕える官人としての性格をもっていたことも示している。すなわちこれらの事例は、一号墓の被葬者たちの権勢が、有力な家族といった階層にはとどまらず、もはや豪族に匹敵するものであったことを示しているといつてよいだろう。

こうした一号墓の被葬者が、六世紀後半の日立地方に、横穴墓という新規の墓制を伴って登場する背景を考えるためには、赤羽横穴墓群が久慈川河口の「久慈の入り江」に面して造営されていることを理解しておく必要がある。当時の海上輸送にとって入り江や河口は天然の港であり、朝鮮半島への航行を経験している大和政権は当然その重要性を熟知していたとみてよい。それゆえ政権は、自己の意を体する人物（一号墓の被葬者）を派遣し、「久慈の入り江」を掌握させた可能性がきわめて高いと考えられるのである。



出土した冠の金銅製立飾り金具

参考文献：鈴木裕芳他 1987『赤羽横穴墓群 B 支群 1 号墓の調査』日立市教育委員会

阿字ヶ浦(阿字ヶ浦中学区)



川子塚古墳は、全長約81m、高さ約9mの市内最大の前方後円墳です。発掘調査が実施されていないので詳しいことはわかりませんが、5世紀後半頃につくられたと考えられます。



磯崎東古墳群では、1950年に54基の古墳が確認されています。古墳は直径約20mの円墳が主体で、1989年に発掘調査された第33号墳のみが全長40mの帆立貝形古墳です(上写真)。同じ年に調査された第30号墳の石棺からは、大刀や鏡が出土しました(下左写真)。また、1967年の調査では、骨でつくられた非常に珍しいやじりが出土しています(下右写真)。



三ツ塚古墳群は、14基の円墳で構成されています。1949年に発掘調査が実施され、埴輪や大刀、鉄鍬、ガラス玉などが出土しています。平磯中学校の敷地内には、第11号墳のものと思われる石棺が移築されています。

ひたちなか市の遺跡6 (平磯・阿)

平磯・阿字ヶ浦中学区には、現在、29の遺跡がみつっています。この中の13遺跡が古墳や古墳群で、市内で最も古墳の数が多い地区です。代表的なものには、市内最大規模の川子塚古墳や、数十基の古墳が群集する磯崎東古墳群、大型の円墳を有する三ッ塚古墳群などがあります。また、中世の遺跡として全国的にも珍しい塩づくりの村の跡である沢田遺跡も存在しています。

遺跡の発掘調査は、2009年までに25回実施されています。1998年に調査を行った泉上遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器が出土しています。古墳の調査は1949年から三ッ塚古墳群・新道古墳群・入道古墳群・磯合古墳群・磯崎東古墳群で実施されており、銅製の鏡や豪華な飾りのある大刀など貴重な遺物が出土しています。1988年から実施された沢田遺跡では、塩水を貯めるための鹹水槽跡や塩水から塩を煮出す釜屋跡などの遺構、塩づくりの道具が見つっています。



沢田遺跡では、海水から塩をつくる揚浜式塩田が室町時代から明治時代まで行われていました。1988年から実施された発掘調査では、塩づくりに関係する釜屋跡100基、鹹水槽跡1393基などが見つかったほか、木製の道具類も出土しました(写真左下)。また、砂浜に埋葬された87体の人骨も見つっています(写真左上)。



泉上遺跡出土のナイフ形石器



新道古墳群出土の刀飾具

2009年までに発掘調査された遺跡 (地図上の●印)

- 平磯小地区：三ッ塚古墳群、平磯宮上遺跡、新道古墳群
- 磯崎小地区：磯崎東古墳群・磯合古墳群、入道古墳群
- 阿字ヶ浦小地区：泉上遺跡、川子塚西古墳群、沢田遺跡、西中丸遺跡



ふるさと懐古館は、江戸時代に建築された土蔵を利館です。展示品には、塩づくりの遺跡の沢田遺跡の世の反射炉関係の資料があります。

- ・開館時間：午前9時～午後5時
- ・休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
- ・入館料：無料
- ・電話：029-262-4650

約 1200 年前

約 2200 年前

約 1800 年前

約 1300 年前



常台研は毎月1回、月例研究会（連絡誌『NOTE』発行）を開催し、研究テーマに沿った研究発表、情報交換、基礎資料の蓄積（先土器資料、土偶資料等）などを進めていった。研究会発足間もなく道成寺貝塚（現・稲敷市）の発掘を実施した。さらに毎年、前浦遺跡の発掘調査を行った。また、遺跡の分布調査も行い、取手から古河までを徒歩で遺跡を踏査したりした。製塩土器の採集が目的であった。踏査活動は稲敷台地・行方台地、鹿島台地においても行った。また、土浦市域や出島村なども踏査を行った。特に製塩土器の採集を目的にしたものであったが、それ以外にも大きな収穫があった。稲敷台地の踏査では野口義磨氏が一緒され、花輪台貝塚では金子進氏らと土偶の実測等も行った。県民文化センターにおける「茨城の考古展」の際は山方遺跡の石器や海後遺跡の土器、鏡塚古墳の石製模造品の実測等も行った。鹿島神宮収蔵資料の実測も行った。

遺跡の保存運動では美浦村陸平貝塚、利根町花輪台貝塚、出島村富士見塚古墳、石岡市鹿の子遺跡などで取り組んだ。見学会には三〇〇人以上の見学者が集まった。また、県内遺跡の破壊状況等をまとめた『白書』の刊行なども行った。さらに、「文化財保存全国協議会」の設立にも一定の役割を果たしてきたものと考えている。長年、理事を出していたが活動の基本理念にかい離が生じたために会を去った。保存

出会い、別れ、そして夢考古学の旅路

第5回 常総台地研究会の設立と活動(2)



常総台地研究会連絡誌「NOTE」の一部



川崎 純徳

運動では関係機関との交渉や関連団体への支援要請、見学会の組織や見学会資料の作成などに忙殺された。茨城考古学会との話し合い、茨城県教育委員会との話し合いなどを行った。しかし、やがて常台研の活動にも限界が見え始めた。年とともに会員の本業が多忙となり、例会の参加がしだいに困難になりはじめていた。そして月例研究会の休止。一〇名前後の小さな研究会の限界であろう。活動の理念は次の「茨城県考古学協会」の設立に受け継がれた。

常台研としての発掘は縄文製塩研究が目的であり、道成寺貝塚、前浦遺跡などで行った。遺跡を踏査して、研究目的に合いそうな遺跡があると、その場で発掘に持つていくかどうかの判断をし、その日のうちに耕作者を探し当て、発掘の交渉を行い、発掘調査承諾書に押印してもらって帰宅するのである。その他に高萩市赤浜古墳群の調査をした。古墳群の踏査中に石器を採集し台地のどこかに石器包蔵地があることはわかっていたので、狙っていたが茨城県で初めて先土器時代の発掘に成功した時の感激は忘れられないものがある。初めての調査成功を聞いて東京大学の佐藤達夫先生が来跡された。その後、何回か佐藤先生から初歩から石器の見方などについて教えをいただいたのも懐かしい思い出である。

*川崎純徳氏のプロフィールは、連載第一回『埋文だより』第二九号に掲載してあります。

十五郎穴横穴墓群館出支群出土の須恵器

佐々木義則・稲田 健一



十五郎穴横穴墓群館出支群（1976年撮影）

十五郎穴横穴墓群は、地形により大きく4つの地点に分布し、横穴墓の数は確認されているものだけで181基あります。この中の館出支群は、古くは江戸時代の書物に紹介されており、1940(昭和15)年には茨城県の指定史跡に登録されています。今回、館出支群で唯一、遺物が出土した32・33号墓の土器の再整理を実施しました。その結果、これらの土器が8世紀第3四半期頃のものであることが判明しました。

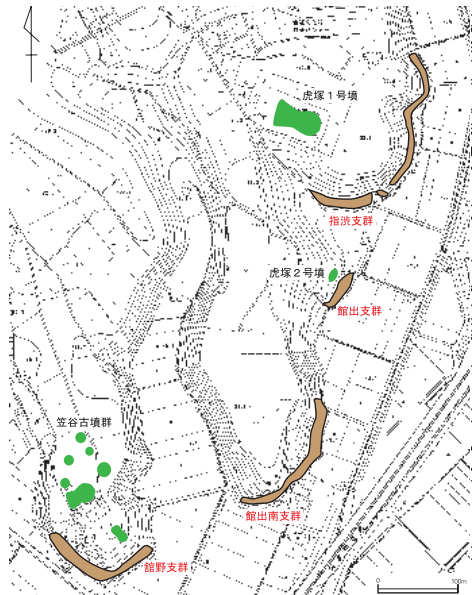


図1 十五郎穴横穴墓群全体図（推定域を含む）

1 十五郎穴横穴墓群について
 十五郎穴横穴墓群は、中丸川支流の本郷川から樹枝状に伸びた谷によって形成された、三つの台地それぞれの凝灰岩層の崖面に造られている。横穴墓群の範囲は、本郷川に沿って約1kmの広がりを持ち、地形により四つの支群に分かれている。支群の名称については、各報告文で統一されていないため、ここでは小字名から「館野支群」、「館出南支群」、「館出支群」、「指洪支群」とした(図1)。ひたちなか市教育委員会が二〇〇五(平成一七)年に確認した横穴墓の基数は、館野支群で一六基、館出南支群で一基、館出支群で三四基、指洪支群で二二〇基の合計一八一基である。二〇〇七(平成一九)年度からは、遺跡の全体像を把握するための調査が開始され、その調査によって新たな横穴墓を確認しているため、全体数は増加しつ

つある。

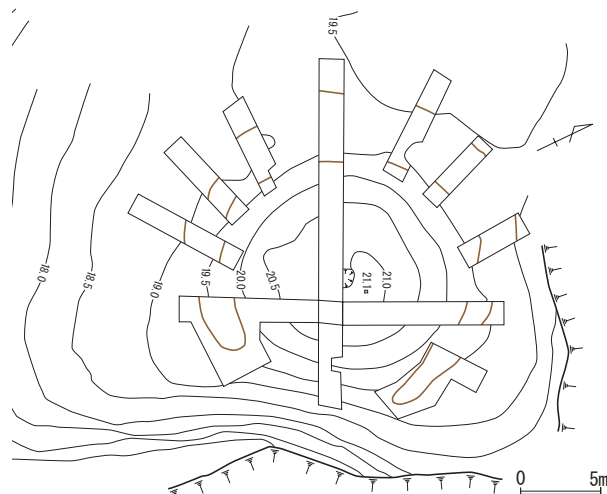
2 館出支群について

(稲田)

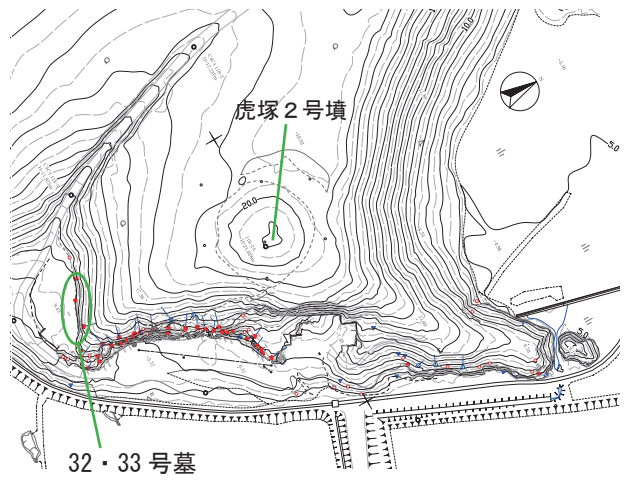
今回紹介する遺物が出土した館出支群は、舌状台地の東側崖面に位置する。当支群の測量調査は、一九七二(昭和四七)年に虎塚古墳群第一号墳の関連調査として、当支群とそこに位置する虎塚古墳群第二号墳(以下、「虎塚二号墳」)で実施された。その時に作成された測量図には、当支群の横穴墓の配置と番号、虎塚二号墳の墳形や周溝が図示されている。その後、二〇〇七(平成一九)年度には虎塚二号墳の墳丘調査が、二〇〇九(平成二一)年度には当支群の測量調査が実施され、詳細な地形図と新たな横穴墓七基が確認された(図2)。虎塚二号墳の調査では、埋葬施設を確認することができなかった。この結果と墳丘が館出支群のすぐ上に位置していることから、虎塚二号墳は館出支群の象徴としての墳丘の可能性が考えられる。

当支群の横穴墓は現在四〇基確認でき、それらの大半が南東側に開口している。玄室構造については、平面形は矩形でアーチ形天井のものが基本で、軒表現と思われる削り出しがみられるものが一基(一四号墓)存在する。

遺物が出土した三三・三三三号墓は、支群の南西端で、他の横穴墓と異なり南西を臨む壁面に位置する。三三二号墓は、一九五〇(昭和二五)年一月に未開口の状態を確認され、井上義氏らが調査を行っている「井上」。横穴墓の玄室平



虎塚2号墳填丘図



0 40m

図2 十五郎穴横穴墓群館出支群と虎塚2号墳（赤色：横穴墓（推定も含む））

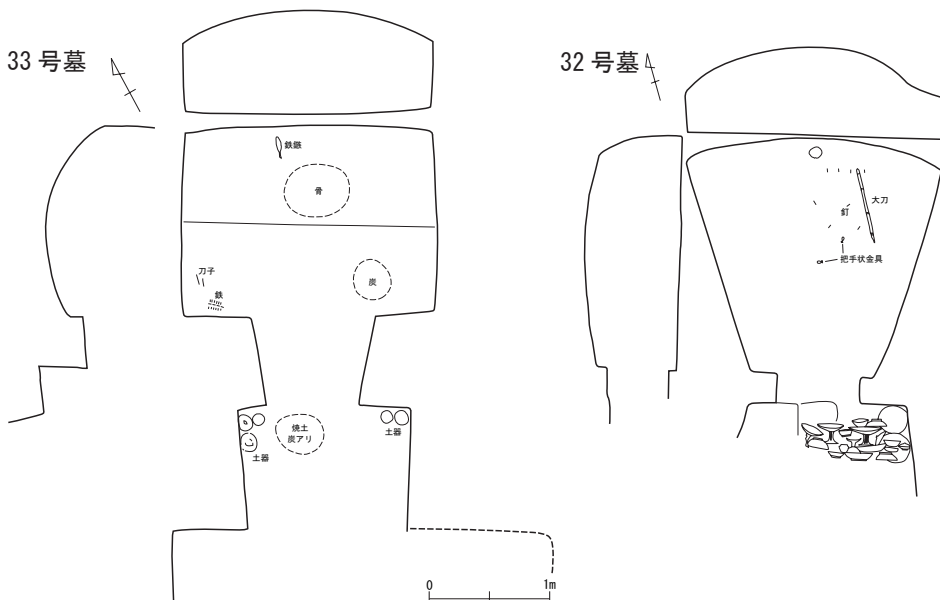


図3 32・33号墓実測図（[井上]を再トレース）

面形は逆台形で、横・縦断面はアーチ形を呈す。規模は、玄室主軸長が約一・九m、最大幅約二m、高さ約〇・七mを測る。遺物は、玄室内から銅装黒作大刀一点、鉄釘三六点、把手状金具四点、鉄の塊、前庭部から須恵器四〇点が出土した。黒作大刀は、奈良県正倉院所蔵のもの

類似しており、現在ひたちなかの市の指定文化財に登録されている。大刀の周辺で出土した釘と把手状金具については、木製の箱の存在を窺わせる。

三三号墓は、翌年の一九五一（昭和二六）年に三二号墓同様に未開口の状態を確認され、調査が実施された「井上」。横穴墓の玄室平面形は長方形で、横・縦断面はアーチ形を呈す。規模は、玄室主軸長が約一・五m、幅約二m、高さ約一mを測る。玄室奥には、床面を一段高くした屍床がみられる。玄室内から火葬骨、刀子二点、鉄鏃三〇数点、鉄釘数点、前庭部から須恵器四九点が出土した。（稲田）

3 資料の混在

本稿で図化した資料群は、佐藤次男による三三号墓出土土器実測図「佐藤次男一九七四」に類似する資料を含む点や、遺物番号のほかに「五一・一一 十五郎穴三四号」という注記をもつ資料が多くみられる点などから、当初は一九五一年一月に調査された館出支群三三号墓出土遺物であろうと思われる。伊東重敏は三三号墓から出土した須恵器の内訳を、「壺二、その蓋一、小形の埴二、大形の高坏二、大形の台付盤二、その蓋二、小形の盤二、坏三一（内台付二、平底二）その蓋五」と記す「伊東一九六六」。佐藤や伊東の記述を参考にして三三号墓から出土した須恵器の器種とその数を復元すると、短頸壺二点、短頸壺蓋一点、小型

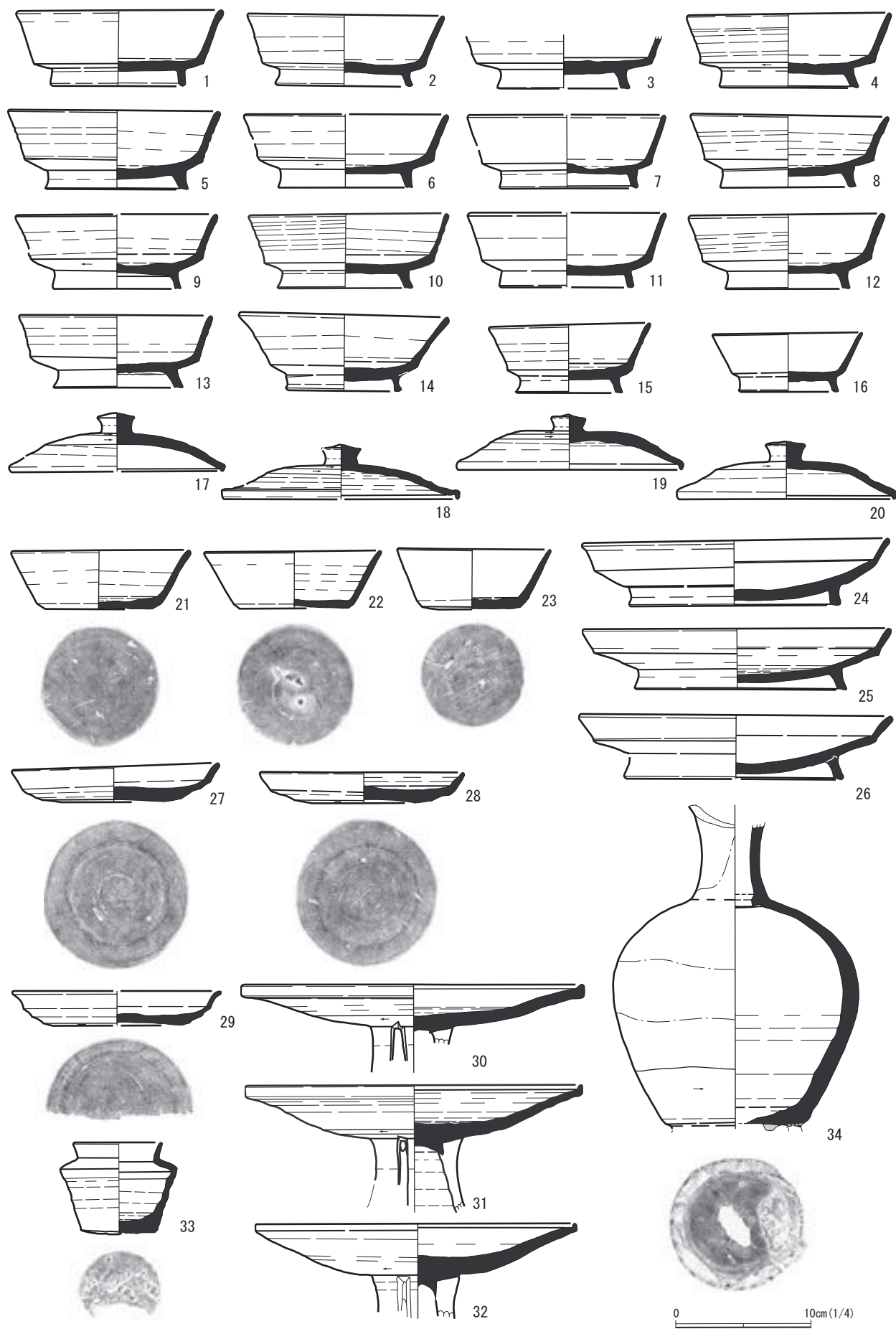


図4 十五郎穴横穴墓群館出支群 32・33号墓の前庭部から出土したと思われる土器群

短頸壺二点、高杯二点、有台盤二点、有台盤蓋二点、小型無台盤二点、有台杯二二点、有台杯蓋五点、無台杯二点、杯体部片(?)七点となる。この数と本稿の図化資料を比較すると、短頸壺二点・短頸壺蓋一点・有台盤蓋二点・杯体部片七点・有台杯六點・有台杯蓋一点・小型短頸壺一点がない。一方、無台杯・有台盤・小型無台盤・高杯は出土数が一点ずつ多い。点数の不足は資料の散逸として理解できるとしても、出土数より多い器種がみられることは、現在の保管資料に三二号墓出土須恵器が混入することを示唆する。遺物番号の注記は一から五二の通し番号が記されていたようであり、この注記の時点ですでに三二号墓と三三号墓の須恵器が混在する形で五二点の須恵器が保管されていたらしい。欠番が二〇ほどあることから、その後、そのなかの二〇点が行方不明となったものと考えられる。三二・三三号墓の調査は戦後まもない頃の個人による調査であったこともあり、当初中根史蹟保存会で保管していた三二・三三号墓出土遺物の所在が転々と移動するうちに資料が混在してしまい、混在した状態のまま通し番号が注記され、さらに移動に伴う資料散逸が加わり、現在みられるような保管状況に至ったものと推測する。結局本稿で報告する資料群は、三三号墓出土須恵器を主体とし三二号墓出土須恵器が少量混じる資料群であると思われる。

ところで34の長頸瓶については「八ヶ崎 三二

三・二五」の注記が、「八重崎支群（現在いう館出支群のこと）昭和二五（一九五〇）年三月三日」の意とすれば、三二号墓調査（一九五〇年一月）以後に三三号墓付近から出土した遺物の可能性が高いのではないかと考えたため、合わせて図化、掲載している。（佐々木）

4 須恵器の説明

本稿では三二号墓と三三号墓の出土遺物を分別することは残念ながらできなかったが、明瞭に分別できないということは、二つの横穴墓の前庭部から出土した須恵器の時期が近接していることを物語る。それは県史料の図「佐藤一九七四」をみても理解でき、両者はおよそ八世紀第三四半期頃の土器群といえる。

器種構成は、有台杯一四點・小型有台杯二點・有台杯蓋四點・無台杯二點・小型無台杯一点・有台盤三點・小型無台盤三點・高杯三點・小型短頸壺一点・長頸瓶一点である。胎土からその多くが木葉下窯跡群産とみられる。明らかに木葉下窯産以外と思われる資料はない。八世紀第三四半期とする年代根拠は、全体的な器種構成のあり方や無台杯・有台杯蓋の形状を主な理由とする。紙面の都合上、細部は後日の検討にゆだねるが、以下特徴的な点のみ指摘しておく。

まず蓋の形状である。木葉下窯産有台杯蓋の編年は未作成であるが、新治窯跡群の有台杯蓋編年「佐々木二〇〇九」を参考にすると、17がC2a類、18・19・20がC3b類に分類され

る。C2a類が八世紀第三四半期、C3b類が八世紀後半に位置付けられ、17の蓋がやや古い様相をもつ。小型無台盤27・28・29は消費地では珍しい器種だが、木葉下窯編年「佐々木一九九七」では生産年代が八世紀第二四半期頃に位置づけられるTE三段階にのみみられるので、全体の器種構成からみれば小型無台盤はやや古い様相をもつ。高杯30・31・32は、脚部の接合形状が30は環状接合、31・32は全面接合「佐々木一九九七」であり、30が古い様相をもつ。以上のように、全体を見渡すと新旧の要素が混在することがわかるが、この様相は伊東・佐藤による三三号墓出土須恵器実測図にもみてとれるので、前庭部から出土した一括資料のなかにすでに生じていた様相といえる。（佐々木）

参考文献 伊東重敏一九六六「横穴墓 一九五一年一月十五郎穴八重崎支群32号横穴墓調査のメモとして」『ひたちじ』5/稲田健二二〇一〇「茨城県ひたちなか市十五郎穴横穴墓群と虎塚古墳群」『シンポジウム 横穴墓と古墳 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会/井上義「茨城県指定十五郎穴三十二号三十三号墳調査書」勝田市中根史蹟保存会/佐々木義則一九九七「木葉下窯跡群の須恵器生産——奈良時代前半を中心に——」『婆良岐考古』第一九号 婆良岐考古同人会/佐々木義則二〇〇九「小美玉市羽黒遺跡から出土した奈良・平安時代土器の紹介」『小美玉市史料館報』第三号 小美玉市史料館/佐藤次男一九七四「十五郎穴横穴群」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県史編さん原始古代史部会

文 埋 センターの 日 々 2010 前期

4月

1・4 虎塚古墳公開／1 藤咲京子氏寄贈資料受入「古銭ほか」／2 明治大学博物館友の会見学／茨城県立歴史館企画展「茨城の人物植輪」へ資料貸出【井上コレクション植輪】



4 市川市考古博物館友の会見学／1 ひたちなか市新人研修／2 ひたちなか市史跡保存対策委員会「虎塚古墳閉塞処理」／20-21 三反田郷塚遺跡試掘調査／20 茨城放送①「ペンケイガイの貝輪」

5月
1 中根小学校6年生社会科見学／2 那珂市菅谷西小学校6年生社会科見学／13-14 本郷東遺跡試掘調査／14 遺跡めぐり「古代製鉄炉にみちのくの技をみる」開催／18



茨城県立歴史館より資料返却／25 堀口小学校3年生社会科見学／26 阿字ヶ浦小学校6年生社会科見学



26 津田小学校6年生社会科見学／28 打木英夫氏寄贈資料受入「石器」／大島中学校へ出張授業「火起こし体験」／29 ワンケースミュージアム16 「ひたちなか市の古代鉄生産」開始
→後谷津製鉄遺跡

6月
1-3 本郷東遺跡試掘調査／1-4 十五郎穴横穴墓群試掘調査／9 鉦田市旭小学校6年生社会科見学／2 ひたちなか市教育研究会英語研究部総会／12 第7回企画展「三反田郷塚貝塚人骨のクリーニング」開始／15 大村冬樹氏（筑波大学大学院）資料閲覧「馬渡植輪製作遺跡出土植輪」

茨城県自然博物館より資料返却
「三反田郷塚オシロワシ」／虎塚古墳草刈り（ときわ会）／茨城放送③「実験考古学」／15-25 本郷東遺跡本調査
→17-18 常陸太田市峰山中学校2年生職場体験



17 外野小学校3年生社会科見学
→18 那珂湊第3小学校6年生社会科見学／市民憲章推進協議会文化部会／22 国立歴史民俗博物館より資料返却「後野遺跡石器ほか」／27 安島郷土歴史研究会／鈴木信義氏寄贈資料受入「戦争関係資料」

7月
1 東海村立白方小学校6年生社会科見学／関口満氏（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）資料閲覧「武田遺跡群鍛冶関連遺物」／3 茨城キリスト教大学博物館実習生施設見学／茨城県考古学協会／神栖市民俗歴史研究会見学／ワンケースミュージアム16 「ひたちなか市の古代鉄生産」終了
→藤本武氏寄贈資料受入「神津島

虎塚古墳 花便り

5 ギンラン

昔、「ぎんさん・ぎんさん」という双子のおばあちゃんが話題になりましたが、実は虎塚古墳の森にも「ぎんさん・ぎんさん」がいます。もちろん人間ではなく、かわいらしいお花の「キンラン・ギンラン」です。前回キンランをご紹介しましたので、今回はギンラン（銀蘭）をご紹介します。この花も、虎塚古墳に咲く花ではキンランと同じく貴重なものです。名前は白色の花から付けられました。

このランは、全体に小さな植物で、高さ10cm程の茎の先端に、三つ五個の直径1cm程度の白色のかわいい花をつけます。残念ながら、現在虎塚古墳の森でキンラン・ギンランが並んで咲く姿を見る機会は少なくなっています。将来は多くのキンラン・ギンランが咲くように見守ってほしいと思います。

（稲田健一）



産黒曜石／二田彦コミセン文化部
会／14-16 高野富士山遺跡試掘調
査／19-25 さと考古学①「楽しい

考古学」(講師・さかいひろ二氏)

／20 茨城放送④「抜歯の歯無し」

／23 伊藤誠氏(茨城県自然博物館来訪)

24-26 さと考古学②「土器の考古
学1」(講師・佐々木義則)／31-ふ

るさと考古学③「土器の考古学2」
(講師・綿引逸雄氏)←



31 ワンケースミュージアム17「黒
曜石の石器?」開始

8月

3-4 君ヶ台遺跡試掘調査／7-ふる

さと考古学④「石の考古学」(講師・
橋本勝雄氏)←



18 高野富士山遺跡本調査開始／
19-25 博物館実習(茨城キリスト教大学・

川村学園女子大学)←



21-ふるさと考古学⑤「土器の考古
学3」(講師・綿引逸雄氏)←



22 第7回企画展「三反田蛭塚貝塚
人骨のクリーニング」終了／25-

27 三反田新堀遺跡試掘調査／26-27

那珂第三中学校2年生職場体験



28 山梨県立博物館企画展「甲斐源
氏列島を駆ける武士団」へ資料貸

出(武田遺跡群出土墨書土器ほか)

9月

2 高野富士山遺跡本調査終了／6

谷田部順一氏寄贈資料受入(三反田

下高井遺跡土器ほか)←



9 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
企画展「土浦の遺跡15 八幡脇遺跡と

古墳時代の玉・鉄」へ資料貸出(武田西堀遺

跡発掘関連資料)／12 港区古代史研究

会見学／25 ワンケースミュージ

アム18「佐藤次男考古学資料Ⅳ」開

始／26 ワンケースミュージアム

17「黒曜石の石器2」終了／28 山

梨県立考古博物館企画展「発掘さ

れた女性の系譜」へ資料貸出(乳飲み

子壺ほか)／29 山梨県立博物館友

の会見学

入館者状況 (2010.4.1～2010.9.30)

月	開館 日数	個人		団体		計
		(人)	(団体)	(人)	(団体)	
4月	26	632	4 (0)	122 (0)	754	
5月	26	377	9 (5)	401 (308)	778	
6月	26	201	9 (3)	379 (250)	580	
7月	27	176	9 (1)	346 (115)	522	
8月	26	317	10 (2)	110 (2)	427	
9月	26	130	4 (0)	123 (0)	253	
合計	157	1833	45 (11)	1481 (675)	3314	

()内は学校数

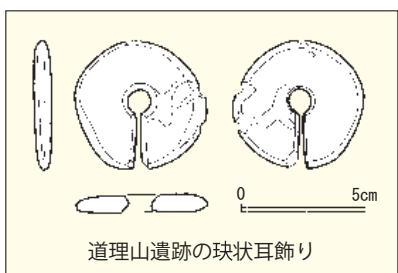
ひたちなか市埋蔵文化財調査センター及び(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社が開催する事業は『ひたちなか市報』及び下記のホームページでお知らせいたします。
<http://business2.plala.or.jp/h-bunspo/>

編集後記の 笑う壺輪

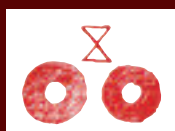
学芸員の資格を取得する大学生のために、博物館実習生を受け入れている。一週間の期間中に、「ふるさと考古学」の土器焼きや、企画展の撤去などを組み込んであり、実習とはいえ、スタップとして重宝させてもらうことになる。今年の実習生は二つの大学から六名が全て女子であった。

実習の最終日に、耳飾りを解説するためのモデルを依頼した。縄文時代の耳飾りは、耳朶を穿孔し、その孔を拡げてから嵌め込む。これをいきなり真似るのは無理なので、耳飾りは近づくにすぎずだけとなる。爪楊枝を軸に旗を作り、それをピアスの孔に差し込んでゴルフ場のように、実際の装着位置を指示しようかとも考えたが、おそらくモデルの賛同は得られないだろう。そもそもピアスを付けた女子は一名だけなのだ。やむなく矢印での表示となる。デジタルで挿入すれば簡単な記号を、わざわざ顔に貼り付けて撮影する。これがアナログの味わいというものだ。

撮影した写真から表紙を選ぶ。採用にならなかった五名には偶然性を強調した理由が準備されることになるだろう。今後、もし実際に耳飾りが装着できるようになったら連絡をいただきたい。



道理山遺跡の殻状耳飾り



ひたちなか埋文だより 第33号

編集 財団法人ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

〒312-0011 茨城県ひたちなか市中根3499 TEL 029-276-8311 FAX 029-276-3699

印刷 株式会社 あげぼの印刷社

2010年10月31日発行

発行 ひたちなか市埋蔵文化財調査センター

表紙のモデルは国井美紀さんです。